

1 深山木の 梢に生ふる 風蘭の 香り床しみ 文に名づけつ 岡潔 作（風蘭）

多くの人は、人には心があることを忘れてしまっているように見えますし、わたしは、わたしの心持を少数の人にでもよいから一度沁しみじみ々聞いていただきたいと思うようになりました。鉢の風蘭の繊細な白い花が見事に咲きにおっていました。

▼夜になると、風蘭はいつそう優しく香り立つようでありました。

2 梅雨明けの 草深き庭の 片隅に 幼きころの ダーリアの花 岡潔 作（風蘭）

そのころ咲いたダーリアに天竺てんしゆくぼたんと呼んだのがありました。赤と白のまだらの小さなダーリアですが、それが、近ごろ珍しくうちの庭に咲きました。それで、はじめて歌というものをよんでみたのです。

▼花が好きだったお祖母さんを、草深い庭に咲いたダーリアに重ねて偲ぶ岡先生。

3 中学で 夜明けの理想を 与えし 浅きねむりに 意欲めざめぬ（風蘭）

中学校の教え方ですが、知性で申しますと、夜がなかなか明けきらない時期です。浅い眠りを揺り動かして目覚めさせる。教育は意欲の方に目をつけることだと思います。いろいろな理想をあたえるのがよろしい。どれか一つもてば、それはもう目標を高くかかげることになる。

▼大事な中学生時代、理想は高く。

4 かべ超ゆる 勇気をくれし ドストエフスキー 優れし文学 未来をひらく（風蘭）

研究の壁に突き当たったときに、海の魚が真水の中に入れられてぐんにやりしているときに一つまみの塩をあたえられるという働きを、ある種のすぐれた文学がしてくれるのです。そういう点において最大の傑作は、ドストエフスキーの「白痴」です。

▼光の屈折で文豪ドストエフスキーの顔も少し屈折。

5 四季ごとに 花咲かせむと こころこめ 世話する祖母に ついて歩きぬ（風蘭）

祖母はいろいろな花をつくりました。死んだ人の命日には、きつと花をあげてお祈りしました。わたしはべつに手伝うわけではありませんが、四季さまさまの花のせわをする祖母のあとをついて歩いていたのです。わたしはそれですっかり花が好きになってしまいました。

▼花の手入れをするお祖母さんと小さなころの岡先生。

6 心なき たわむれに散る 師の泪 今も思われ 孤村の唱に（風蘭）

小学五年のとき、わたしをたいへんかわいがってくださった唱歌の女の先生があり、「花あり月ある孤村の夕べ、いずこにつながん栗毛のわが駒」よくおうたいになった歌です。先生には、私が同級生のあとについていたずらをして、泣かれてしまったことがある。

▼女性の恩師、古村先生との思い出。

7 紅梅の 情のいろどり 女性なり 男性は士気 香りなるらし（風蘭）

一口に言って、男性は知から情へ動くのです。ところが、女性は情から知へ動く。動くというのは、意志がその向きに働く、ということなのです。女性は、花でいうならば、そのいろどりであ

って、「色香も深き紅梅の」というのが女性で、これが情緒です。男性はその梅のかおり、土気といわれているほうだということです。

▼岡先生は毎年、紅梅と白い梅花を押し花にしました。

8 行きづまり 無意識で読む 水滸伝 道元禪師の 心不可得か (風蘭)

いつも数学の研究が行きづまると、「水滸伝」などを読みたくなるのです。しかし、「水滸伝」をいつも選ぶことは分かっているけれども、なぜ選ぶのかはわからない。相当の無意識なのです。道元禪師(*注)が「正法眼蔵」で書いておられるのがこの無意識のことで、「心不可得」というのが正しいのではないかと思えます。

*注 鎌倉時代初期の禪僧。日本における曹洞宗の開祖。

▼道元禪師が「心不可得」の字に紐をつけ、たぐりよせようとしている。

9 人が先 自分を後に この訓え 世界の紛争 すべてかいつ (春宵十話)

私の祖父は数えの五つの年から祖父の死に至るまで一貫して「他を先にし自分を後にせよ」という道義教育を施した。

▼紀見峠、岡先生の顕彰碑。世界の人々にこやかに。「どうぞお先に」「いえあなたから」。

10 野にスマレ 咲いているだけ それでいい 学ぶよろこびは 発見のよろこび (春宵十話)

よく人から数学をやって何になるのかと聞かれるが、私は春の野に咲くスマレはただスマレらしく咲いているだけでいいと思っている。私については、ただ数学を学ぶ喜びを食べて生きていくというだけである。その喜びは発見の喜びである。

▼スマレが無心に揺れている。幼子の手の中で。

11 発見の 鋭い喜び 問われるれば 碧条揚羽 木に見つけし時 (春宵十話)

数学上の発見には、それがそうであることの証拠のように、必ず鋭い喜びが伴うものである。この喜びがどんなものかを問われれば、チョウを採取しようと思っただけ、みごとなやつが木にとまっているのを見たときの気持ちだと答えたい。

▼岡先生、発見の鋭い喜びに思わずジャクンブ

12 人々の 心を和ます 数学よ 解けてみれば 一筋の糸 (春宵十話)

三月からこの山脈を登ろうとかかった。しかし、さすがに未解決として残っているだけあって随分難しく、最初の登り口がどうしてもみつからなかった。……九月に入ってそろそろ帰らねばと思っていたとき、中谷さんの家で朝食をよばれたあと、隣の応接室で座って考えているうちに、だんだん考えが一つの方向に向いて内容がはっきりしてきた。

▼解決すればすつとする。溶けてみれば一筋の意図。

13 論語には 学を楽しむ 境地あり 春風吹く場に 住むところかな (春宵十話)

論語(*注)に最初は学をつとめ、次に学を好み、最後に学を楽しむという境地の進み方を述べたことばがあるが、この楽しむというのが、学問の中心からの 春風の吹く所に住むことにほかならない。

*注 孔子とその弟子たちの問答をまとめたもの。

▼「子曰く……」

14 善行は 打算含まぬ 行為なり 橘媛や 菟道稚郎子うじのわきいらつこ（春宵十話）

このくにて善行といえれば少しも打算を伴わない行為のことである。たとえば橘媛命がちゅうちよなく荒海に飛びこまれたことや菟道稚郎子命がさつさと自殺してしまわれたのや、楠木正行たちが四条畷の花と散り去ったのがそれであつて、私たちはこういった先人たちの行為をこのうえなく美しいとみているのである。

▼荒海に飛びこむ橘媛命。たちはなひめのみこと

15 ありふれし 確かな道を 眺むれば 理得らる 数の喜び（春宵十話）

中学五年のとき冬休みの少し前から「完全四角形の三つの対角線の中点は同一直線上にある」という証明問題を、消し炭を使って図を描いては考え込んでいた。数学の問題をこれほど解きたかつたのは、この一、二年間だけだった。オタマジヤクシでも、によきによき手足がでる時期があるように、問題を解きたくなるのにも時期があるわけだろう。

▼難問を道に描いて考える。川の中ではオタマジヤクシに手が出て足が出て。

16 大いなる みどりの地球 奇蹟なり 奇蹟をまもる 宇宙の存在（春宵十話）

地球全体が一つの大きな緑の球なんです。こんなきれいな緑の球なんて一つあるのが奇蹟なんです。宇宙があるから地球があるんだっていいですけど、逆かも知れない。一つしかない地球を維持するために宇宙があると考えたほうがいいですよ。

▼星座の海をゆく小惑星探査機はやぶさ。

17 数学は 闇を照らす 光である こういう世相に 大いに必要（春宵十話）

のんきな数学など必要ないと思う方もあるかも知れません。しかし、数学というものは闇を照らす光なのであつて、白昼にはいらぬのですが、こういう世相には大いに必要となるのです。闇夜であればあるほど必要なのです。

▼災害の多い日本。闇を照らす灯台の光。

18 開拓し 三つの未解 これ見つけ 問題ありと 人生を生き（春宵十話）

一九三四年だったが、「多変数解析関数論について」がドイツで出版された。これはこの分野では詳細な文献目録で……これを丸善から取り寄せて読んだところ、自分の開拓すべき土地の箱庭式にはつきりと展望でき、特に三つの中心的な問題が未解決のまま残されていることが分かつたので、これに取り組みたくなった。

▼フランスにて。若き日の岡先生。やがて生涯の研究、三大問題に出会う。

19 思案つき 夜はホタルと あそぶとき 気持ちゆるみて 難問解ける（春宵十話）

昼間は地面に石や棒で書いて考え、夜は子供をつれて谷間でホタルをとっていた。殺すのがかわいそうなので、ホタルをとっては放し、とっては放ししていた。そんな暮らしをしているうちに突然難問が解けてしまった。これなど気持ちがゆるんでないと発見できないという例の一つだと思う。

▼紀見峠の自然が岡先生を育て、応援した。

20 クリフオード 示す定理の 神秘なる 用器画せむと 格闘の春（春宵十話）

中学三年のとき、二か月ほど図ばかり描いていたことになる。しかし、今思うと、これが私に数学の下地を一番つけてくれたのに違いない。この定理だけは、いまだに証明しようと思つたことがない。証明してしまえば、当たり前前のことになって神秘感がうすれるからである。

▼岡先生がクリフオードの定理と格闘している後ろ姿。

21 芸術と 数学は良き 旅の連れ 悠久の影 理想ぞ見ゆる（春宵十話）

理想とか、その内容である真善美は実在感としてこの世と交渉を持つもののように思われる。芥川龍之介はそれを「悠久なもの影」とあらわしている。真善美のうちで最もわかりやすいのは美だが、私はこの実感を確かめるのが楽しくて、よく絵の展覧会に学生達を連れて行く。数学のもつとも良い道連れは芸術であることを知ってもらいたいからである。

▼旅のゆくてに待つのは虹？ それともブロッケン現象？

22 情緒には 民族ごとの 色調ありて 春の野に咲く さまざまの花（春宵十話）

人の中心は情緒である。情緒には民族の違いによっていろいろな色調のものがある。たとえば春の野にさまざまな色どりの草花があるようなものである。

▼早春の野を彩る 春の七草。

23 道義のもと 人の悲しみ むずかしい それに分かるは 二十歳をすぎて（春宵十話）

道義の根本は人の悲しみがわかるといふことにある。人の感情、特に悲しみの感情は一番わかりにくい。人が悲しんでいるから自分も悲しいという程度にまでわかるのに、少なくとも二十歳の声を聞かねばならないのではないか。

▼受験の失敗か、それとも失恋か。涙にくれる青年と、静かにその背をさする友。

24 全身の ちから込め なおたましいが 原理発見 峠の空気（春宵十話）

数学上の発見には、それがそうであることの証拠のように、必ず鋭い喜びが伴うものである。この喜びがどんなものかと問われれば、……この発見の鋭いよこびということばも、寺田寅彦先生の文章から借りたものである。

▼修験道の神仏が宿るとされる山の峰々。

25 情緒の 中の調和を そこねると 人の心は すぐ腐敗する（春宵十話）

情緒の中心の調和がそこなわれると人の心は腐敗する。社会も文化もあつという間にとめどなく悪くなってしまう。

▼心の腐敗。恐ろしい戦争。

26 日本語は 簡潔さなら 世界一 水の流れる 勢いありけり（春宵十話）

日本語はものの詳細を述べようとすると不便だが、簡潔にいい切ろうとすると、世界でこれほどいい言葉はない。簡潔ということは、水の流れるような勢いを持っているということだ。

▼滝のそばで、恋の告白。

27 芸術の 目標何かと 聞かれれば 数学とおなじ 調和なるかな（春宵十話）

数学の目標は真の中における調和であり、芸術の目標は美の中における調和である。どちらも調和という形で認められるという点で共通しており、そこに働いているのが情緒であるという

ことも同じである。だから両者はふつう考えられている以上によく似ている。

▼芸術と数学が握手。

28 人として 大切なことは 何よりも 他人の悲しみ 情を知ること(紫の火花)

他人の情の中では、悲しみが一番わかりにくいと思います。だから私は、人として一番たいせつなことは他人の情、とりわけ他人の悲しみがわかることだと言ってきたのです。

▼いじめられている子を守る。惻隠の情。

29 よい家庭 つくる秘訣は 夫婦して 自我を遠ざけ 情をはぐくむ(紫の火花)

人の家庭は放っておいたのでは出来ない。新夫婦は二人とも、「自我」を抑止しなければならぬ。それを続けていると、二人を隔てている自他の別がとれ、よい家庭が出来上がってゆく。樹が土の中深く根を張ったようなもので、もし地上に嵐が吹き荒れようと、びくともしない。

▼いたわりあう夫婦愛。

30 古の 情緒は深く かぎりなし それぞれに聞く それぞれの時雨(紫の火花)

古の情緒はどれもみんなよい。「価値判断」が古人と明治以後の私たちとで百八十度違うのである。古人の価値判断は、それぞれみなよい。種類が多ければ多いほど、どれもみなますますよい。聞けば聞くほど、だんだん時雨のよさがよくわかってきて、深さに限りがない。

▼それぞれの時雨。農業をやっている人は農村の時雨。

31 なにごとも そうか否かを 問う前に こころの喜び 感じられるか(紫の火花)

私にはすべては「そうであるか、そうでないか」の問題ではなく「それで心が安定して心の喜びも感じられるかどうか」の問題なのだと思う。

▼喜びがすべて。心が嬉しいということが正解。愛犬はいつもそれを教えてくれる。

32 何ひとつ 知らぬ自分と 気づくとき ほのかに開く 知への扉は(紫の火花)

知について言えば、人は本当に何も知らないといってもよいくらいなのに、たいいていことは知っていると思ってしまうであろう。これが知の麻痺である。視点を定めて一つのことを凝視していると、だんだん知らないことばかりになってくる。少し知が働いてきたのである。

▼これはつづらの扉。扉が開いてそこから光が差している。

33 教育は 教えただけでは 身につかぬ ポケットの中の 薬包と同じ(紫の火花)

教育は何か教えさえすれば直ぐ効くと思っようですが、これは非常な迷信です。それでは薬を包紙のままポケットに入れたようなものであって、全然身につけていないのです。

▼ポケットに入れたままの薬では風邪を治せない。

34 夜の闇 恐れることなく 各々が 思索つづける 民は栄える(紫の火花)

興る民族は夜の闇を恐れない。夜は一人一人別の位置にすわって、一人で思索することを好む。ところが滅びる民族の特徴は、これと反対で、変に夜の闇におびえ、夜は一かたまりにかたまってでないとおられない。

▼紫の火花。岡先生の著書のタイトル。

35 人の子は 人らしくなる 進化しつつ 一年かけて 歩みはじめる (紫の火花)

動物の牛や馬は生れおちるとすぐ歩くが、人間の子は歩くのに一年はかかる。これはその間に、すぐ歩けるように成育するのをおさえて、人らしくなるように準備しているのである。

▼赤ちゃんが一年かけて歩みはじめたところです。

36 あるがまま 純粹直観 咲かせよう 菊それぞれの 咲くがうれしき (紫の火花)

この純粹直観によるものを菊の花だとすると、私はもっぱら菊の花を咲かせようとしているのである。天賦によって大輪、小輪の別はあるだろう。私は、菊の花でありさえすればよいと思っている。また、多変数解析関数を教えているところは今は日本にここしかないから、来たるものは拒まず式に世話をして、咲くものにはみんな菊の花を咲いてもらおうと思っている。

▼岡先生は小学生のころ、菊のつぼみが花開くまで毎日観察した時期がある。

37 大海の 儂き泡が 自分とは 思いもよらぬ 無明のころ (紫の火花)

私たちは実は何も知らないのであって、私たちの知情意は、まるで大自然の純粹直観の「大海に浮ぶ一泡の如きもの」。本当にわかっているものは何一つないのに、人は普通、大抵のことは皆知っていると思っています。そうとしか思えないらしい。これが無明 (*注) です。

*注 無知、真理に暗いこと。

▼泡となって儂く消えてしまった人魚姫。

38 獣の 跳梁跋扈 内心にあり 自由そこなう 自分の敵なり (紫の火花)

真の自分は真我であって、自我は自分ではなく、自分の敵です。だから真の自由とは、外界からだけの自由ではなく、内心の自我からの自由もあわせ意味しなければなりません。もう少し程度を下げて申しますと、野獣性の跳梁跋扈 (*注) はその人の非常な不自由を意味します。

*注 悪人などが権威を無視して、わが世とばかり暴れまわること。

▼獣が我がもの顔で、のさばり跳ねまわっているところ。

39 フランスより 帰りきたりし たそがれに 若葉匂える ふるさとの山 (春風夏雨)

フランスから帰って、電車で郷里の谷あいにはいると、ちょうど五月であったが、木の葉のよいにおいがした。電車を降りて、峠 (和歌山県、紀見峠) への道を歩くと、日はもう暮れていたが、むせるような甘い若葉のにおいがした。フランスにはこのにおいがないのである。私は自分のくにに帰ってきたのだという気がした。

▼情緒の道の石碑と、若葉のにおい。

40 日本が ただただわたしは 好きである 自然人の世 まことになつかし (春風夏雨)

私は日本が好きである。なぜ好きかと聞かれるとすぐには返事ができない。……私には日本の自然や人の世の一々が非常に「なつかしい」。だから私は日本が好きなのである。

▼昔はどこでもこんな光景が見られました。

41 人は水 一人ひとりが 澄みゆけば 国なる水槽も だんだんと澄む (春風夏雨)

私は人というものが何より大切だと思っている。私たちの国というのは、この、人という水滴を集めた水槽のようなもので、水は絶えず流れ入り、流れ出ている。これが国の本体といえる。ここに澄んだ水が流れ込めば、水槽の水は段々と澄み、濁った水が流れ込めば、全体が段々に濁っていく。

▼若いころ農作業を終え、お母さんと飲んだ湧き水の味。忘れられない。

42 一人ひとり 博愛のこころ 持ちよりて はじめて叶う 集団生活（春風夏雨）

自由、平等は自己主張であって、博愛は自己犠牲である。博愛を欠いては、人は集団生活を営めないこと、初めから明らかである。

▼地域の清掃ボランティア。

43 人はみな 大自然の子 教育は ほんの少しの 手伝いにすぎず（春風夏雨）

教育でどんな子でも作れるというのではない。本当は人が生まれるのは大自然が人をして生ましめているのであって、各人はそれを自分の子と思っているが、正しくは大自然の子である。それを育てるのも大自然であって、人をしてそれを手伝わしめているのが教育なのである。

▼大自然の中で汗をいっぱいかいて遊ぶ子供たち。

44 人間は 二十憶年で 進化した 崇高な歴史に 謙虚なこころ（人間の建設）

進化論、つまり人は単細胞から二十憶年かかってここまで進化してきたのだということをお教えしていることは、たいへん意義あることだと思うのです。このごろの人のやり方を見ておられますとそういう崇高な人類史にたいする謙虚な心がありません。

▼動植物のいのちを戴きながら進化してきた人間の歴史。謙虚なこころで「いただきます」

45 今の子は 同級生を 敵と見る 友と思える 教育のぞむ（人間の建設）

いまの中学生は同級生を敵だと思えないと言っています。私は義務教育は何をおいても、同級生を友だちと思えるように教えてほしい。同級生を敵だと思えることが醜い生存競争であり、どんな悪いことであるかということ、いったん、そういう癖をつけたら直せないということを見落していると思います。

▼上杉謙信は、敵將の武田信玄に塩を送った。競争心はあっても優しさを根底に。

46 並び立ち アインシュタイン 岡潔 情緒の発掘 古来の宝（人間の建設）

アインシュタインが相対性理論を出し、原子爆弾が落ちるまで二十五年しかかかっていない。自然科学で今できることと言ったら、一口に言えば破壊だけでして、科学が人類の福祉に役立つとよく言いますが、今の科学文明というものは、殆どみな自然からの借り物なのです。自然にたいしてもっと建設のほうに目を向けるべきだと思います。

▼腕相撲する岡先生とアインシュタイン。

47 個人主義 新憲法の 前文で 考えてるほど 甘くはなし（人間の建設）

日本は戦後、個人主義を取り入れたのだが、個人主義というものは日本国新憲法の前文で考えているような甘いものではない。それに同調して教育まで間違ってしまった。その結果、現状はひどいことになっている。それに気づいて直してもらいたいと、私は呼びかけています。

▼日本国憲法の前文を読んで考えこむ日本人。

48 素晴らしい コツホの発見も 戦争で 悪くなるのが あまりに早し（人間の建設）

コツホ（*注）がコレラの原虫を発見した。これはすがすがしい科学の夜明けでしたが、それから第一次世界大戦を始めるまで、破壊力が科学によって用意されるまでに、たった三十年し

かかかっていないのです。すべて悪いことが出来上がるのがあまりに早すぎる。
*注 ドイツの医師、細菌学者。

▼熱心に研究するコツホ。

49 種ができ 枯れてくりかえす なぜか少し 進化する自然 人も同じなり (人間の建設)

草は種からはえては大きくなって、花が咲いて実ができたら枯れてしまう。またその実から芽を出して、繰り返し繰り返し繰り返してありますが、これはまったく同じことを繰り返しているのではなくて、こうしているうちに少しずつ、なぜか知りませんが、進化している。

▼壮年の木、若木、お爺さんの木。

50 極端に 熱中すれば 好きになる 試験目当ては 学問でない (人間の建設)

人は極端になにかをやれば、必ず好きになるという性質をもっています。好きにならぬのがむしろ不思議です。ただ試験目当てに勉強するというような仕方は、人本来の道じゃないから、むしろそのほうがむずかしい。

▼試験目当てではなく本物の学問を。

51 獣には 欲情調整 ついている 放っておいても ひどくならない (人間の建設)

獣類の頭には、本能や欲情に対する自動調節装置がついているのですね。放っておいてもひどいことにはならない。ところが人の頭には本能や欲情に対する自動調節装置は全然ないので、その代わりに意識して自主的に抑える力が大脳前頭葉に与えられているのです。

▼獣は戦うとき、相手が同じ種なら、殺すまではやらない。

52 心の眼 開いてないと わからない 秋の日射しの 深いおもむき (月影)

心の眼が開いていないと、もののあるなしはわかるが、ものよきはわからない。たとえば秋の日射しの深々とした趣はけっしてわからないのである。

▼心眼。パツチリ。

53 数学に よく似てるのが 詰将棋 詰まらないから 不思議に思う (月影)

数学によく似ているのは詰め将棋である。これは詰まらないからいかにも不思議に思う。だからおもしろいのである。そういうときは盤や駒は使わない。目はやはり閉じているのだが、額の裏とおぼしき所に盤や駒が見えるのである。

▼上手くなったな。さては詰将棋で腕を磨いたか。

54 研究は 未知のものへの 探求で 学問芸術 生み作り出す (月影)

数学の研究について自分にはわからないと思う人が多いかもしれないが、これは既知のもの、研究と思うからである。研究といえはすべてそうであるが、未知のものを調べるのであって、形のまったくない所にだんだん形が現われるようにしていくのである。学問芸術の各分野における「生み出す 作り出す」という働きはすべてこの形式なのである。

▼研究室で学問や芸術が育つ気配あり。

55 日本では 犠牲的行為を 善として 人生渡る 指針と為した (月影)

日本には犠牲的行為をたやすくできる人が多く、人々はそれを善と考えて人生を渡るときの指針にしていたのである。

▼おぼれている人を助けるのは、犠牲的精神がないと難しい。

56 日本人 人の悲しみ よくわかる 観音大悲 情の根底（月影）

人の中心は情であって、情の根底は「人の心の悲しみを自分のからだの痛みのごとく感じる心」すなわち観音大悲の心である。

▼人々の苦しみをかならず救ってやろうという観音菩薩の大きな慈悲。

57 孫にいう 人の喜び わかるよい子 嫌がるを見て 喜ぶべからず（月影）

私の孫の話です。童話の絵本を見せながら、王さまが家来の喜ぶのを見て喜ぶほうが、自分が喜ぶよりも楽しい、という所へさしかかりました。孫に「お前、ひとの喜ぶのを見ると嬉しいか」。「ううん、嬉しくないよ」。それで私は教えました。「ひとの喜ぶのを見て喜ぶのはよい子だよ、ひとの嫌がるのを見て喜ぶのはいけない子だよ」。

▼泣いているお兄ちゃんをみんなで慰める。ポチも。

58 恥ずかしさ 向上の力 なりにけり 日本民族 大昔から（月影）

「恥ずかしさ」というのは向上の原動力だと考えたのでして、日本民族をよく調べてみますと、大昔からそうなっているように思えるのです。古事記によって見ますと、何十万年という昔からそうであると思うのです。

▼恥ずかしい！ 次はもっといい点取るぞっ！

59 用おえて ゆかりの品は 失えど 記憶の絵巻き 褪せることなし（春の草）

私が見ている過去の絵巻物は、祖父の果断のおかげで、すっかり箱の中の元気な羊（*注）のようになつてしまつています。結局、祖父は私より一段上の立場からみて私をよく教育したので、その筆頭にあげるべき教育法は、すんだものはどんどん売ってしまうというこのやり方かもしれない。

*注 サンIIテグジュペリの小説「星の王子さま」に登場する羊。

▼立派な髭をたくわえたお祖父さん。厳しかったけれどそれもまた愛情。

60 純粋な 日本人たる 自覚もち 誇り育てむ 日本文化に（春の草）

外国からなにか大切なものを輸入しようとする、かならずその国の文化がそれとともにはいつてくる。純粋な日本人であるという自覚のできているものは別にどうということはないが、自覚のできていないものは、いつもそちらを向いてよろめいてしまう。よろめいた結果、自国をダメだとし、外国をえらいとしてしまう。

▼吉田松陰と塾生の表情は、ちよつといいかも。

61 速く読む ちからは育ち 身を助く 中学時代に おもしろき本（春の草）

読書力のうちには速く読む力もふくまれている。その力をつけるには、小学校に引き続く一、二年間に長いおもしろいものを読ませるのがよいのではあるまいか。のちに私がパリ・ソルボンヌ大学の数学図書館で、その文献だけを読んで、自分の生涯をかけて開拓しようとする土地を選ぶ大事業を企てることのできたのは、この日本語の読書力のおかげです。

▼読んで読んで読みまくる。

62 寺子屋は 論語素読や まる暗記 しらずしらずに 精神統一（春の草）

寺子屋（*注）では論語その他の素読や、意味をよく知らないまま字を書くことなどをさせていたのです。一口にいえば丸暗記させることです。わたしはこの方法が意志的活動をさせるいちばん安全な方法と思います。丸暗記をしていますと、自然に精神統一をしています。

*注 江戸時代、子供たちに読・書・算の初歩を授けた私設の教育機関。

▼愛犬ポチも精神統一。

63 日本人 衝動行為 多いのか 武士は刀の 鏢つばに凝りけり（春の草）

衝動的判断はよく行為にまで延長される。どうも日本人は衝動的行為が多すぎるようです。昔の武士は刀の鏢つばに実にこったものだが、これはだし抜けに切りつけられたとき、鏢つばで受けるより仕方がないからというのがことの起こりである。どれほど衝動的かわかるでしょう。

▼若いのが、ちよつと待て。話せばわかる。わからんか。

64 親切で 勤勉であれば それでよし 悲しみわかり 熱心にせよ（春の雲）

日本人は親切で勤勉であればよろしい。親切というのは、人の心、わけても人の悲しみがわかることです。勤勉というのはたとえば、あなたが算数をやるとしますと、算数を熱心にやることです。出来不出来ではありません。親切で勤勉な人がえらい人なのです。

▼勤勉は日本人のアイデンティティ。薄れてきている。見直してほしい。

65 岡潔 坂本繁二郎 その対話 日本の夜明けと 共に涙す（春の雲）

坂本繁二郎との対話の中で「日本の夜明けという気がします。」と行ってハラハラ涙を流された。わたくしも、自覚した日本人に生まれてはじめて会ったと思った。そうするとそれまでの頭の冬眠状態が一度に直ってしまった、からだもいっぺんにしゃんとした。そして日がたつても後にもどらなかつた。言葉ではないのである。

▼岡先生、坂本繁二郎氏、二人の波長がぴつたり合った。野菜が急にいきいきとした。

66 利己主義が 情緒の中心 故障させ 善の清水を 濁らせている（春の雲）

終戦後、アメリカから「小我主義」を取り入れて、この清水を濁り水に変えてしまった。これはいわば、善の基本方向をそれまでの犠牲的行為から正反対の利己主義に変えてしまったのであって、多くの日本人が茫然自失するのは当然である。なお、これはやはり情緒の中心の故障であるが、原因は内にある場合だから、私の時のような方法では治らない。

▼利己主義は、おれおれ詐欺より始末が悪い。

67 西洋は インスピレーション 文化なり 日本民族 情緒型なり（春の雲）

わたくしが一番好きなのは日本民族の昔を懐かしむことである。数学の研究を実際に行ってみて、その発見の型に「インスピレーション型」と「情緒型」のあることを体験によって知った。西洋の文化を見るとすべてインスピレーション型で、東洋のものをみるとすべて情緒型である。

▼通商交渉場面に。る！ と契約書を引き破る外国。まあまあと日本。情緒型。

68 人はみな 人世に暮らす 一生は 喜び悲しみ 生きる知恵かな（一葉舟）

人は、人の世に暮らしているんですね。それが人の一生です。人の世に暮らすとはごく簡単に申しますと、人は喜んだり悲しんだりして生きるものです。それが人です。

▼人の世はいいこと、嫌なこと、どっちもある。お日さまとお月さまがあるように。

69 生きがいは 情緒を形に 結ぶこと 喜び生まれ 真善美みな（一葉舟）

人らしい働きとは、生きがいを感じることです。自分の感情を形に現したり、行為に現したり、芸術上の創作、学問上の発見のみならず、つまり美、真のみならず、感情を日常の行為に現わすというのもある。——これが善の道ですね。その働きを創造の働きといっているのです。

▼真なら命懸けで直訴した人。善なら笠地蔵のおじいさん、美なら静御前のイメージかな。

70 尊きは いにしえ人の 人らしさ 多く捨てたり 戦後の教育（一葉舟）

戦後は非常に多くのものを捨て去っている。それを拾いあげなくちゃならない。とくに物質的でないものをいろいろ捨てたんです。非常に大切なものをね。歴史教育にもっと力をそそぐ。教育されて人ができあがるというのは、人らしく知情意が働くということです。

▼GHDの影響とはいえ、大切なものをたくさん捨ててしまった。そんな気がします。

71 幼子の 曇りなき目に 物心の 森羅万象 飛び込んでくる（一葉舟）

情がよく発育するように教育するのが情操教育です。一、二、三歳は大自然がもつばら情緒、つまりこころを育てる季節で、母が愛と信とを教える。この頃の幼児は物心両面の「見える目」、くもりのない瞳に、万象のほうから真情にとびこんでくる。

▼幼子の澄んだ目は宇宙のすべてのものを吸収する。

72 意の教え 使わずことで 発達し 意思的努力 クリエイションへ（一葉舟）

この知と意については教育に負う原理は、使わずことによって発育させる原理、しごく簡単であって、しかもほかにない。以前は覚えるのが原則でしたが、この頃は記憶しなくてもよいことになっている。ところが記憶には、非常に意思的努力がいます。これが統一の力になり、クリエイションの働きは、前頭葉で精神統一下に行われる。

▼ルーブル美術館で、子供たちが名画を真似て、自由に絵を描いている。

73 自分から 進んで深く 考える 創造力は 知力の働き（一葉舟）

努力の教育では、知力の根本、創造力ですね。創造力というのは、前向きに自分から進んで自分を忘れるほどに深く考えると、はつきり前頭葉の働き（*注）になり、前頭葉を発育させる。それが知力です。それをやっていますね。思考が浅ければ側頭葉の働きになってしまいます。

*注 情緒の中心が人の一番中心で、次の中心は脳前頭葉。感情・意欲・創造の働きをする。大脳前頭葉の抑止の働きがなければ、側頭葉の衝動的な生活しか営めない。

▼自分で深く考えていたら、どんどん進んでいく知力の働き。

74 無差別智に 大いなるものの 大叡智 我が知力かと ポアンカレ感う（一葉舟）

フランスの大数学者ポアンカレが本に、発見は人の頭のどういう働きによるのか、自分にはいかにも不思議だといった。しかし、無差別智（*注）のことは東洋人には少しも不思議でなく、人の知情意および感覚に働く力である。ただ日本人は明治以後に西洋から物質文明を大急ぎで取り入れ、その中に住んでしまったので、今では全くわからなくなっている。

*注 大脳の不思議な働きをさす。理性の地金になっている知力のこと。この力の働いていることを、本人は少しも意識しない。

▼数学の大好きなポアンカレ。カレーの大好きなポアン・カレー。

75 数学は いのち燃やせし 結晶と 陛下に答えし 昭和の慶よき日（昭和への遺書）

私は文化勲章を戴いたとき、陛下から「数学はどうしてするの。」という御下問を受けた。私は少しあがつていたから、「数学は生命を燃焼させて、それを結晶させて作るのです。」とお答え申し上げた。日本民族は数学を愛することが出来るから数学出来るのである。

▼昭和三十五年十一月三日。この日、岡先生は文化勲章を受章。

76 ころ一つ 皆で日本を 愛すべし 安住の地は まさにこころなり（昭和への遺書）

日本が、一つの国として存立し続けようと思うならば、其処に住んでいる人達は、今日日本国民と呼ばれている人達の全体で国を作るということに同意したのだから、その国を愛するようにしなければいけない。この住みなれた日本列島以外には、安住の地はないと目覚めて欲しい。

▼伊勢神宮の鳥居のもと、紳士と淑女が集います。

77 向上の つよい意志力 例うれば ついには岩も くだく松の実（昭和への遺書）

海辺の松の実が大きな岩の上に落ちる。松の実は実に骨を折って、岩を穿って少し根を下ろす。雨が降ってその孔が濡り、冬が来てその水が氷る。水の膨張力で孔が少し大きくなる。来る年も来る年もこの努力を続ける。遂にはさしもの大岩も真二つにわれる。強靱な意志力の姿。

▼小さな松の実ががんばった。

78 先人の うつくしき水 よい行い 学問芸術 子らに伝えむ（心といのち）

きれいな水というのは、たとえば先人たちの残してくれた文化の水である。これも子供を対象にしていうなら、先人の残した学問、芸術、身を以て行なつた善行、人の世の美しい物語、こうしたいろいろな良いものを知らせるのが大切であろう。

▼橋本のだんじりも大切な文化の水。

79 ものの良さ 伝える努力が 実るとき 子供の心 いきいき育つ（心といのち）

現代は他人の短所はわかってても長所はなかなかわからない。学問の良さ、芸術の良さもなかなかわからない。しかし、そこを骨を折ってやつてもらわねば、心の芽のいきいきとした子は決して育たない。教育は、ものの良さが本当にわかるようにするのが第一義ではなからうか。

▼岡先生が春宵十話をプレゼント。

80 たくましき わかりやすいが まだ足りぬ 人のかなしみ 知りて緻密に（心といのち）

いま、たくましきはわかってても、人の心のかなしみがわかる青年がどれだけあるだろうか。人の心を知らなければ、物事をやる場合、緻密さがなく粗雑になる。つまり対象への細かい心くばりがないということだから、いつさいのものが欠けることにほかならない。

▼病人の心のかなしみ、苦しみ。その気持ちを十分に汲んでほしい。

81 真我をば 自分と思う 一生は 長い旅路の ほんの一日（心といのち）

真我（*注）を自分と思っていると、この一生が長い向上の旅の一日のように思われる。こう思つてやれる人はぜひそうしてほしいものである。

*注 心理学の対象となつている心ではなく、他人の喜びを心底喜べる観音菩薩の心。

▼奥の細道が書かれた晩年、足腰の弱つた芭蕉と、しっかり補佐する頼もしい曾良。

82 古の いのち喜び 脈打ちぬ 万葉集は 人世のたから (日本民族)

万葉集というのは人類の宝庫である。実際、胡蘭成氏は万葉集と詩経とが人類の二大宝庫だといっている。……なんとという引きしまって強い歌の調子であろう。心の大空はからりと晴れて生命はじかに外界に脈々として脈打っている。雄大で喜びに充ちている。

▼犬養孝先生の書が刻まれている真土の万葉歌碑。自然石では日本で一番大きな歌碑である。

83 なんとなく 深き心の あらわれは 言葉にすれば 阿頼耶識なり (日本民族)

「外界も内心も深い心の現われである」ということが、なんとなく、わかっているのである。この「なんとなく」というところは人によって非常に差があると思う。この悟りを指すのならば、「阿頼耶識 (*注) の悟り」というのがよいであろう。

*注 過去から未来へ向かって大河のように流れて行く永遠の生命。

▼はるばると阿頼耶識の河を渡ってゆく観音菩薩の舟。

84 非自非他ひじひたの 芭蕉ばしやうの調べぞ 秋深し 隣は何を する人ぞとや (日本民族) (岡潔集第五卷)

自我の自覚から解脱しなければこんな句は詠めない。江戸の街を蔽おほうて、深々と秋が来ているでしょう。これは「非自非他ひじひた」といわれる人の世の本質の色どりである。懐かしいのには違いないのであるが、厳粛な懐かしさなのである。

▼人が幸せだと自分も幸せ、人が悲しかったら自分も悲しい、非自非他のこのころの世界。

85 人と人 よく情が通じ 自然にも 情が通じる 日本人かな (岡潔集第五卷)

人と人との間にはよく情緒が通じ、人と自然の間にもよく情が通じます。これが日本人です。

▼橋本市役所の正面に立てられた岡先生の顕彰碑と、子供たちのじゃんけんぼん！

86 西洋の 物質主義は 人死ねば それで終わりと 考えにけり (岡潔集第五卷)

明治以降、日本人は西洋の物質主義の中に住んで、人は死ねばそれっきりとしか考えられなくなったようだ。明治以前の日本人はそうは考えなかった。

▼西洋では、THE END でおわり。

87 発見した 不定域イディアル 問題を 解く道ひらく 偉大な道具 (岡潔集第五卷)

発見した不定域イディアルは、それまでに解決できなかった大問題をいくつも解決に導いている。現代数学にはなくてはならない重要な道具である。

▼不定域イディアルは現在も数学の世界で広く使われているスパナのような道具。

88 仏教では 諸悪莫作しよあくまくさ 悪するな 衆善奉行しゆぜんぶぎやう よい事をせよ (岡潔集第五卷)

仏教では、諸悪莫作 衆善奉行 悪いことをするな。よい事をせよ。これが戒律です。これを守りつづけると心が浄化され、善行が向うからくる。春くれば花が咲くように。

▼閻魔さまと阿弥陀如来さまに見守られ、何度も何度も善行のポイントを重ねていこう。

89 出征前 正成公の 子守唄 父の歌声 心に沁みて (日本のこころ)

私は一九〇一年に生まれた。日露の風雲將に急ならんとする時である。だから私は多分いつ出

征するかもしれない陸軍少尉の父にねかすつけてもらった。父は私に日本歴史中の人物の個々の行為について「心情の美」を教えようと努めたものと想像される。

▼岡先生が幼いころ、日本では楠木正成の歌がたくさん作られ、歌われていた。

90 老松の かなでる調べを 背に聞きつ 文よむ峠の 家静かなり (日本のこころ)

私は静かな峠の上の家で読書味を愛あいきょうした。老松のかなでる松風の音を聞きながら。その家は軍用道路になり、トラックのひどい埃である。松風や道は白々と乾けり。その老松だけでも県境に立っている。その頃の懐かしい印象は決して古くはならない。

▼岡先生の成功の陰にはいつも妻のみちさんあり。

91 頌徳碑 石刷り軸に 懸けたくは 秋霜烈日の 厳しさ懐かし (日本のこころ)

祖父は私に、自分を後にし他人を先にせよ、これ一つだけを私の五つのときから、厳しく命じたのである。私は、橋本市の小高い丘の祖父の頌徳碑をぜひ石刷りにとって軸にして懸けて置こうと思っている。そのころの秋霜烈日の厳しさが今は非常になつかしいからである。

▼岡先生の祖父・文一郎氏の頌徳碑は、橋本市の丸山公園に建立されている。

92 崖つぶち 義務教育に 頼むべし 澄んだ心で 情操高く (日本のこころ)

私には日本民族はいま絶滅の崖つぶちに立っているようなものとしか見えぬ。それだけでなく、世界的にみても、人類は葬送行進曲を続けてやめないようにしか思えない。そんな状態なぜ教育のような迂遠なことを話すのかと思われるかもしれないが、この危険状態から脱するにはよく教育するしかないのである。日本の危機もまた教育、特に義務教育から来ている。

▼岡先生はよく「崖つぶちに立っているつもりでしつかりやりなさい」と若い人を励ました。

93 生命燃やし 君子の数学 作るもの 心の中に 心の目で見 (日本のこころ)

数学は自分の心の中にあるものを心の目でみてやるのである。これを君子の数学という。この方法でちゃんとやれば自分で自分がわかる。計算などというまだるっこいことをしなくても、純粹直観（*注）でわかるのである。オリジナルは生命の燃焼によってしか作れない。灼熱した高いポテンシャルエナジーがなければどうにもならないのである。

*注 感覚、特に視覚のそれを通さないもの。

▼池に石を投げこみ、波紋を見ながら長いあいだ、数学を考えていた岡先生。

94 教育の 根本方針 古から 君子をつくり 小人つくらず (日本のこころ)

よく批判的精神などといって、小学校の一年生あたりから「批判」をさせているようですが、これは明らかに衝動的判断で悪質です。人の長所がわからず短所に対する嫌悪感の強いのを小人といい、人の長所がよくわかり短所に寛大なのを君子といいます。

▼ほめて育てよ。大きく深い情愛、人も動物も。

95 心の中に 数学世界 見て創る 遊び興じた 箱庭に似て (日本のこころ)

三、四年生は箱庭がとても好きだったらしい。おもしろい枝ぶりの木があると、覚えておいて、これはあそこに植えようと頭の中で箱庭をたえず変える。この天性は私の今の数学研究法と本質的に同じもので、心の中に数学的世界を創るということにまで通じている。

▼箱庭遊びが数学の世界へ。

96 懐かしさ 正義心をば 教えられ おとき花籠 日本少年（日本のこころ）

三、四年生は情緒の中心を仕上げる大切な年ごろである。「魔法の森」からは、なつかしきという情操を教えられ体取し、「琴の由来」からは、なぜ憎しみがいけないのかという疑問を植え付けられ、「ひわの行方」からかわいそうにと、慈悲心、正義心を教えられた。人の子に理想あらしめている大自然の叡智が既にもっともはかりしれぬものではなかるうか。（愛読書「おとき花籠」「日本少年」収録の童話より得たこと）

▼ファールブルが書いた昆虫よりも、人の子への、大自然の叡智がもっとはかりしれない。

97 情操型 前頭葉での 発見は 喜びともに 春の長閑けさ（日本のこころ）

情操型発見のためにぜひ必要なことは、大脳前頭葉が関与しなければ決して判断できない、という癖をつける。情操型の精神統一は、景色は見えているが、それに何の関心も持たない。発見の時、どんな喜びが伴うかというのと、長閑な春のようなかんじである。

▼前頭葉の帽子をかぶって、長閑な春を満喫。

98 紀見峠 大きな景観 美しく 天才育む 世界の宝（夜雨の声）

橋本市は私の里である。紀ノ川が流れ、少し隔てて葛城山脈が走っている。ここから見ると葛城山脈のちょうど真向かいの所は非常に低くなっている。紀見峠といって、私の郷里である。峠を上るにしたがって景観が開けてくる。南に大和アルプスの連峰が見えるのである。こういう所に育ったから、私は数学でも景観の大きい論文や問題が好きである。

▼博士が文化勲章なら、みちさんは内助の功勲章かな。

99 冬枯れの 霜おく野に 緑の芽 大根畑に 草を抜く人（夜雨の声）

「生きる」ということを小さな子供に教える時、冬枯れの季節、野の中にあって、大根畑だけが緑色に生き生きしている、これは大根畑が生きているわけです。生命の緑の芽を守るには、理想的には人の悲しみがわかる心でまもるのが一番良いと思います。

▼大根を作るのも人の悲しみがわかる心で。

100 うれしけれ 強い心の つながりで 美しい国に よくぞ生まれり（春宵十話）

ともになつかしむことのできる共通のいにしえを持つという、強い心のつながりによって、たがいに結ばれている国はしあわせだと思いませんか。まして美しい国にうまれたことをうれしいと思いませんか。歴史が美しいとはこういう意味です。

▼美しいこの国に生まれたことへの感謝をこめて。

引用させていただいた岡先生の著書

《風蘭》 《春宵十話》 《紫の火花》 《春風夏雨》 《人間の建設》 《月影》

《春の草》 《春の雲》 《一葉舟》 《昭和への遺書》 《心といのち》 《日本民族》

《岡潔集第五巻》 《日本のこころ》 《夜雨の声》

◆解説の見方

① 100 うれしけれ 強い心の つながりで 美しい国に よくぞ生まれり (春宵十話)

② ともになつかしむことのできる共通のいにしえを持つという、強い心のつながりによって、たがいに結ばれている国はしあわせだと思いませんか。まして美しい国にうまれたことをうれしいと思いませんか。歴史が美しいとはこういう意味です。

③ ▼美しいこの国に生まれたことへの感謝をこめて。

① 岡先生の著書から引用した箴言を短歌にしました。最初の数字と札の左上にある数字が対応しています。

② 短歌の解説です。

③ 読み札に使用した絵についての解説です。読み札と一緒にご覧ください。

◆本解説のデータはこちらからもご覧いただけます

<https://okakiyoshi-mw.com>



岡潔先生箴言かるた (令和元年度新企画)

企画・編集・発行

橋本市岡潔数学WAVE

絵 上辻淑子

協賛 ピグマリオン学育研究所